
いけいけ！風紀委員長

真嶋雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いけいけ！風紀委員長

【Nコード】

N2397D

【作者名】

真嶋雪

【あらすじ】

一言で表すと面倒くさがりな俺、桜坂孝太・中学二年生は、入学式翌日一方的に知っているだけの存在、学園一の有名人間宮茨まみやいばらによって風紀委員長にされてしまったのだった。更新が困難になったため永久停止いたします。続きは別所で書かせていただきます。ご愛読ありがとうございます。

プロローグ（前書き）

妙なテンションの青春学園コメディー。プロローグはやたら短いです。

ブローグ

特に目立つことなく適当に卒業できればそれでよかった。（だって目立つと面倒なことに巻き込まれやすくなるから）そう、そうなるように面倒だけでも少しは考えて「目立たない方法」を考えて実行してきたのに。

彼女は、彼女を筆頭とする彼女含み六人の俺と同じ学生であるはずの人たちはあっさりとそれを打ち破り俺を非平凡な日々へと巻き込んでくれた。

昔はただ迷惑だとしか感じてなかった（正確には感じないようにしていた、だ）けれど今なら彼女達に頭を下げて言えると思う。

「俺を変えてくれてありがとう」

そう、ちゃんと言えらると思う。

act 1：ハローハロー

…重い。

自分の腕にこれでもかというほどに積まれた教材を見てうんざりする。

季節は紛れもなく春。入学式シーズンにのっとりてだか何だか知らないが俺の通う王崎学園で入学式兼始業式が行われたのはつい昨日のことだ。要するに今日は、まだ進級してから二日目。なのにだ。なんで俺は進級してまもなくの今日、教材を運ばされているんだろうな。出席番号もかなり半端なのに。桜坂孝太、だぞ。まだ出席番号覚えていないにしても中途半端な位置にあるのは分かるだろ。補足しておくと俺は中学一年生時代に先生たちの信頼を買うほどの成績を修めたわけでも生徒の手本になるような良い素行だったわけでもない。

「おう桜坂」

「がんばれよー孝太ー」

腕に大量に教材をのせて廊下を歩く姿は周りがほとんど何も持っていない中だとかかなり目立つらしく、職員室を出た直後からかなりの視線を集めている。知り合いの中では話しかけてくるやつもいた。見てるなら手伝えよ。思わず憎々しげににらむと、知り合い達は部活だからだとかデートだからだとかテキトウな理由をつけて逃げていった。ちなみにこの場合のデートの相手は大抵ギャルゲーのヒロインのことだ。

次々に去っていく薄情な知り合いの応援を受けつつやっぱり面倒だと思いつながらダラダラと歩いていると、当然ながら時間はかかったがようやく教室の前に辿りついて、そして重要なことに気付いた。両手が塞がってちゃ引き戸が開けられないか。

誰が使うことになるか分からない教材を今日はまだ掃除されていない、つまりは埃やら泥やらで汚れている廊下に置くわけにもいか

ず、仕方がないので窓側の壁にもたれかかって誰かが引き戸を開けてくれるのを待つことにした。

「…ん？何してんの？」

声がしたほうに顔を上げる。知らない女生徒が多分部活のものであろう荷物を肩にかけていた。同じクラスの人だろうか。

「…ああ、開けらんないのか」

パツと見て理解したらしく、俺の数メートル先にある引き戸に手をかける。が、通常ならスムーズに開くはずのそれはびくりとも動いていなかった。不審に思い、近寄って様子を覗き見る。

「…開かない？」

「みたい。…何か突つかかっているのかな」

口調こそ軽いが、手にはものすごい力が入っているのが分かる。引き戸の手をかけるところがミシミシいつてる。…そのうち壊れるんじゃないの、これ？

引き戸の心配をしていると、その人は急に引き戸から手を離れた。数歩後ろに下がったので先生を呼びに行くのかと思ったけれど俺の目前で止まったのでそうじゃないらしい。

「はあっ！」

「っ！？」

いきなり俺に向かって後ろ向きに飛び蹴りをかましてきた。いや俺を狙ったわけではないのだろうけど。咄嗟に何とか右に飛びのいてなんとか回避する。（教科書を抱えていたせいでそこまで飛べなかったけど当たらなかったのは飛び蹴りをかましてきた人が当たらないようにしたからだろう。…凄いな）目を瞑ったので何が起こったのかよく分からないけど音だけは長い間（のように思えたけど実際は10秒もかかっていない）響いていた。バターンと最後に大きな音を残して音はやんだ。何が起こったのか想像しつつ瞼を開けるとそこには想像通り教室側に引き戸が倒れるという普通に学校生活を送っていたら見られなさそうな光景があった。

「開いたよ」

「…そうだ、ね」

少し思い悩んだが、教室の引き戸を踏んづけるなんてめったにできる体験じゃない、貴重な体験その二だ、とそんな感じのことを自分自身に思い込ませて結局無遠慮に踏んづけた。…壊れてないよな。俺の体重に負けてないよな。そこまで重いつもりはないけど。

「あ、孝太」

「秀」

窓際一番前の席に秀が座っていた。

…林原秀^{はやしはるひ秀}。小学校五年の頃からずっと同じクラスの天才少年。どれくらい天才かというと、俺の貧困な語彙力では表せないくらいだ。正直羨ましいが無いものねだりをしてもしようがない。

「あれ、友達だったんだ」

「誰と？」

「金郷さん」

「…金郷？」

「呼んだー？」

廊下から三列目の一番前の席からさっきの人が来た。俺の席の二つ前だったんだ。気付かなかった。

「ああ、自己紹介してなかったか。私、金郷秋雨^{こんじょうあきめ}。見てのとおり君の二つ前の席に座ってるんだ。よろしく」

「…あ、桜坂孝太です。よろしく…」

「よろしくっ」

差し出された手をゆっくり掴むと、その上にもう片方の手を乗せられてぶんぶん上下に振られた。

act 2：よろしくと言う束縛

「そんなわけでどの委員会に入りたいか決めてみてくれ！…ん？桜坂、どうしたんだそんな恨めし気な目をして」

恨めしいからだよ先生。

そんな言葉を面と向かって吐き出せるはずもなく、俺はただ苦々しくため息をひとつついた。あんなに重い荷物を持たせた人を誰が恨まないでいられるか。

「ああ、いきなり運ばせちゃったからかなーはっは。まだ二日目だからさ、なるべく適任の人のほうが良いと思ったんだ」

「…適任？」

「そ、適任。まだ何の称号も持っていない人よりは風紀委員長って肩書きある桜坂のほうが？どうした桜坂」

…は。

……今、なんと？

………風紀、委員長？

「…ふうき…？」

「ああ風紀委員長…ってあれ、さっき言わなかったか？」

言っていない言っていない激しく言っていないどれくらい言っていないかというと言葉で表すことさえできないほど言っていない。

…てか、

「何で勝手に決まってるんですか本人の意思とか無視ですか？」

「無視というか何と言うか他にできる人がいなかったから仕方ない

よな」

「三年生はどうしたんですか少なくとも前期委員長は三年生がするはずでしょう」

「残念ながら今回委員会に入れる余裕がある三年生は一人しかいないよな」

「じゃあその人にさせればいいじゃないですか」

「いやでも風紀委員会と生徒会だったら生徒会のほうが三年生いたほうがいいだろう？…それに、その三年生が桜坂を推薦したんだぞ？」

「…誰ですかその三年」

「…聞いて驚け、まみやいばら間宮茨だ」

間宮茨。その名が出たとたん、教室中にざわめきが走った。

間宮茨：校内でその名前を知らない人は今年入学したての生徒以外にはいないだろうといわれるほどの超有名人。別に良い行いをしたとかではない。170cm代後半というかなり高めの身長を誇っていて、男子制服を着ているがれっきとした女だ。なぜ女子用を着ないのかと聞かれるたびに「サイズがないから」と答えているが嘘だ。200cm用のものがあるのだから180cm用のものがないはずがない。サボり魔で遅刻常習犯だけど成績は常にトップクラスの人達と争ってるくらいなので先生達も文句を言いづらい。

…まあ、そんな人。

ちなみにもちろんだが俺と間宮先輩に関係など無い。ただ、去年一回だけあの人のクラスにプリントを届けに行ったときにすれ違っただけだ。あとは何回か校内で会ったかもしれない。でも、ただそれだけだ。会話なんて交わしたことも無い人。

なんでそんな人が俺を推薦するんだ。

「…まあ、そんなわけで風紀委員長は今日から桜坂だ。このクラスからは後二人風紀委員を決めるんだが、やりたい奴いるか？」

そんな面倒な委員会やりたがる人いるのかと思っただけ。

「あ、先生。僕やります」

「私も」

…なんかあつさり決まった。

「それじゃ、このクラスの風紀委員は桜坂孝太、林原秀、金郷秋雨！この三人に任せようと思う。他にやりたい人は いないな。それじゃ、拍手ーっ」

パチパチと鳴り響く拍手の中、二人が俺に向かって口パクで何かを伝えていた。

『よろしくね』

『がんばろうな！』

…まあ、やれるだけやってみようかな、と思う。やれるだけ、だけだね。

a c t 2 : よろしくと言う束縛（後書き）

やっと進みました：o r z

サブタイは特に深い意味は無いです。2話目の表面だけで言ったらこんな感じかな、と思ったので。

act 3：突きつけられて

風紀委員室（空き教室の一室を先生が無断で拝借したものだ。使っていないから良いだろうと何故か根拠もない自信に溢れていた）の中央、窓の近くには一つの大きな机があつて、俺はその前に置いてある回転椅子に座っていた。…ここ、元校長室じゃないの？

そんな俺の疑問なんか知らないとはかりに山済みにされたプリント。もはや嫌がらせとしか思えない。

風紀委員長になって一日目、早くも変化が表れた。

「委員長！お茶買ってきたけど飲む？」

「…あ、うん。ありがとこんご…」

「秋雨で良いよ。呼びやすいでしょ」

「じゃあ、ありがと秋雨」

金郷さん…秋雨との呼び方が変わった。俺は金郷さんから秋雨に、秋雨は君から委員長になった。別にいいとは言ったけど何か武士道がどうか言っていて俺には良く分からなかったのでとりあえず委員長で良いや、みたいな感じになって落ち着いた。

「あ、孝太。先生がこれも追加だつて」

「…また…か」

秀がどき、とプリントの山をプリントの山の脇に置いた。前が見えなくなりそうだ。

風紀委員、つて言うから俺はただ学校の風紀を乱さないようにデキトウに努力すればいいのかと思っただけれどうやらそうじゃないらしい。…というか、今年から変わっただけらしい。生徒会も二年生ばかりだからってことで去年生徒会がやっていた仕事の一部が風

紀委員に回ってきたとのことだ。ああ面倒くさい。

プリントの山の一部を取り分けてざっと目を通す。山三つ分は全て文化祭の費用についてのプリントで、後の二つ分は文化祭のその他のことについてのプリントだ。俺が見ているのは費用についてのプリント。この学園はクラスと部活がやたらに多いのでかなり面倒だ。

野球部、出し物は出店とバッティングゲーム。費用は70000円ほど。高くないか。70000に二重線を引いて50000に直す。脇に足りなかったときのために金を取りに来る生徒を一人決めて置いてくださいと書いて野球部のプリントを脇にやる。…そんな作業の繰り返しだった。

「…ん？委員長、1年1組と1年5組が喫茶店で被ってるんですけど」

「場所は？」

「クラスでやるそうです」

「……ま、いいや。収入減るけど良かったらって書いておいて」

「分かりましたー」

「…孝太」

「ん？」

「部屋のレイアウトに塩を使いたいつて」

「塩？…まあ、とりあえず良いつてことで」

「分かった」

塩？…まあ、どうでもいいか。

そんな感じで俺たちは昼休みと放課後を返上して仕事に取り組んでいた。

「んー！つつかれたー。それじゃ、お疲れ様でした！」

「お疲れ様でした」

「…お疲れ」

秋雨がまず部屋を出た。準備が早い。

プリントの角を合わせてから筆箱を鞆の中にしまつて、ぐつと腕を伸ばしてから鞆を肩にかけた。久々に長時間座ったまま腕を動かしたから疲れた。

秀の準備も終わってさて帰ろうかと言つとき、

「んだとてめえ！？もういっぺん言ってみろよ！」

廊下から、怒鳴り声が聞こえた。

a c t 3 : 突きつけられて (後書き)

前後編になった…

まとめるつもりだったのにおかしいな。

act 4：散りゆく時間

「…秋雨？」

いくらなんでもこれは凄いなと思うほどの怒鳴り声だったので身体ごと廊下に出ると、そこには秋雨と見知らぬ女子生徒の姿があった。…上履きの色からして、多分三年生だと思う。俺が思わず呟いた言葉は興奮している様子の二人には聞こえなかったようで、二人がこちらを向くことは無かった。

「何度でも言っておけるわよ。あなた、どんな卑劣なことして風紀委員になつたわけ？」

ひれつ？……ひれつって。

「ねえ秀」

「ん？」

「ひれつってどういう意味？」

「えっと…それはどっちの意味で解釈したら良いのかな？」

どっちと言われても。

……ああ。

「広辞苑にはひれつってどういう意味で載ってる？」

「ああ、それなら

「あららごめんなさい。お猿さんには卑劣って言っても分からないかしら」

かなり驚いた。俺のことかと二人の方に振り向いたけれどまだ気

づいたような様子は感じられない。…まったく関係ない話だけれど、このとき俺は秋雨の成績が少しかり気になった。後々質問して後悔することをこのときの俺は微塵も知らない。ま、知ってたら凄いですけどね。

「どうしたの金郷さ」…るさいなあ」

「…なんですって？」

「うるさいって言ったんだよ」

地の底から聞こえてきそうなくらい重く低く響く声が聞こえてきた。…発信源は、間違いなく秋雨だ。

「…何事」

「切れちゃったみたいだね」

見りや分かる。そうじゃない。問題は、

ゴオオオオオオオオオ…

窓は全て閉まっているはずなのにどこからものすごい強風が吹いていることだ。…いやどこからじゃないな。俺には秋雨から吹いているように見える。

「僕にもそう見えるよ」

良かった。俺の目に異常はないらしい。

…ところで、この非科学的現象は何で起こってるんだろう。あの二人が原因なのは目に見えているけれど、それにしても秋雨が怒っただけでこんなことになるなんてなんだここは。二次元か。仮想現実なのか？

「あれ、孝太…秋雨さんの噂、聞いたことない？」

「噂？」

「そ、噂…っていうか、真実なんだけどね」

世界に名を馳せる『小野塚武道館』の師匠と呼ばれる存在の直接弟子は九割方『氣』を操れるようになる。もちろん普段は氣など使わず、使う場面と言ったら試合のときくらいなのだけれど、感情が制御下からはみ出てしまった場合はたまに起きるそうだ。『氣』の暴走が。今回の秋雨の強風もその『氣』の暴走が原因なのではないかということだ。

…聞いたことないけど、秀が言うからには本当なんだろう。

「……っ！あ、あれ？先輩、どうしたんですか？」

「…金郷さん…貴方…」

「え？」

「ファンクラブの準備を…しておく…わ」

「え、ちょ、せんぱい!？」

もはやわけが分からないがとりあえずそろそろ帰れそうだ。ずり落ちかけていた鞆をもう一度かけなおして、廊下に脚を踏み出した。

結局、卑劣の意味は家で調べた。

a c t 4 : 散りゆく時間 (後書き)

書きたいことが書けてないです…

一段とぱっとしなくなりましたorz

気、の件は自分も予想外でした。後に繋がるかどうかは、そのときの自分次第です…

繋がって欲しいですがorz

act 5：秘密ひみつヒミツ！

「よし、それじゃ何の競技出たいか決めとけよー。希望数が多いときはジャンケンだからなー。でもジャンケンの練習とかするなよー」

する奴いるのか。いまどき。

担任の言葉にあきれつつもため息を漏らした。ジャンケンの練習つて、勝ったら負ける確立が増えるだけじゃないのか？ いや、勝敗5割ずつっていう根拠は俺には説明できないけれど。

…そんな感じで、俺のクラスでは今運動会の競技決めをしていた。ちなみに全校の中で三番目に決めている。担任が体育教師だということだから早く決まるみたいだ。一番目のクラスも二番目のクラスも、担任は体育教師だったから。

競技は学校が大きいだけにたくさんあった。メジャーなリレー、徒競走、縄引き、球入れはもちろんパン食い競争、障害物競走、二人三脚、借り物競争など俺は小学生の頃までは漫画だけの物かと思っていたものまである。去年はそれなりに楽しみにしていたものだが今年は正直なんでもいいというか、面倒というか。

俺は運動会があまり好きじゃない。好きな奴に言ったらそれはもう罵りに罵られるだろうが面倒だし汗かくしなんかこう…嫌だ。そもそも運動が得意なわけじゃないし。別に苦手じゃないけど。

「秀、何に出るの？」

「え、僕？」

「秀はクラス対抗リレーに決まったんだよな！」

「…そうなんだ」

秋雨が教えてくれた。

まあ、無難だと思う。秀は成績優秀なメガネ君なだけじゃなく運動も結構…いやかなりできるから。文武両道ってやつか。羨ましい。ふと前に視線をやると、クラス対抗リレーのところに先生が名前を書いていた。林原秀、木川太一…もう一人が先生の身体に隠れて見えないな。…あ、女子のほうに金郷秋雨ってある。

「秋雨もリレーの選手なんだ」

「あ、はい！こう見えても結構速いんですよ！」

「がんばって」

「え？…やだなあ、委員長も出るじゃないですか！」

「…は」

間拔けな声を漏らした俺に秋雨はほら、と言いながら黒板を指差した。先生は質問に答えに行っているので既に見えていなかったところは見えるようになっていた。林原秀、木川太一の下には確かに桜坂孝太という俺の名前が書いてあった。

…そんな馬鹿な。俺足速くないのに。速くないというか速いほうの分類にも分けられないと思うよっていうくらいなのになんで俺が。

「…先生」

「お、桜坂ーリレー、頑張れよー」

「…聞いてないんですが」

「ん？そうだったか？まあいいじゃないか。お前さん、足速いんだからさ」

「速くないです。実際にタイムは…」

「桜坂。先生を甘く見ちゃいけないよ。…普段、手抜いて走ってるだろ？」

「ッ！？」

なぜばれた

今まで誰一人にだってばれなかったのに。

「まーあともかく、頑張れよ！」

そう言つて先生は教卓のほうに戻つていった。俺もしぶしぶ自分の席に着く。秀と秋雨が俺のほうを見てにつこりしていた。頑張ろうね、の表情だ。頑張りたいくない。面倒くさい。

…そんな俺の心の葛藤（と呼んでいいかわからないけど）をよそに運動会の種目決めは着々と進んでいった。…はあ。

a c t 5 : 秘密ひみつヒミツ！ (後書き)

(^ ^ ;)

思ったことを文にするのは難しいですね…。

act 6：お疲れな人々

…まあ、そんな感じで俺にとってはおろかな思い出になっちゃいな
い運動会は先生のすごく嫌な発言とともに始まり、準備期間はあつ
という間に、本番は嫌になるほど長く時間をかけて終わった。これ
が高校卒業まであと四回もあるのかと思うと憂鬱になりすぎて泣き
たくなる。…まあ、そこまでじゃないけどとにかく嫌だ。
それになにより

「…風紀委員会に、何か用？」

「プリントを届けにきただけだが」

「ああそうそれはどうも。次からはノックくらいしろよ」

「それは失礼したな」

…秋雨と夜光が随分と仲の悪い知り合いとして知り合ってしまった。
いやまあ、根は喧嘩するほど仲が良いってやつで仲は良いんだ
と思う。ただあの二人が出会った際にこうなるのは勘弁だ。秀は止
めようとしなから俺が止めなきゃいけないし。

「…プリント、受け取るよ」

「ああ」

「…じゃ」

「じゃあな」

プリントの束を机に置くと、秋雨が扉に 正確に言うところの向こ
うにいる夜光 に向かって心底腹が立っているような表情でべーと
やっていた。それを宥めつつ貰ったプリントを見る。

一番上に文化祭準備期間と大きく躍っている。ああ、そういえば
そんな時期だったか。この期間は文化祭の準備のために毎日一時間

もしくはそれ以上、授業がつぶれる。それに喜ぶ生徒もいれば（まあ大半がそうだけど）俺みたいにうんざりする生徒もいる。こんな面倒なことするくらいなら勉強してたほうがまだ良い。それにその期間がとても長い。文化祭があるのが夏休み明けなのに夏休みが始まる一ヶ月以上前にやるなんて、いくらなんでも長すぎるとは思わないのだろうか。…なんてことを一年生の頃は考えていたのだけど、文化祭は準備期間が長すぎるのに深く納得できるほど膨大なものだった。まあ、今でもとてつもなく面倒くさい期間だと思うことに変わりはないけれど。

「…孝太、このプリントについては生徒会と話し合いをしろって書いてあるけど」

「え…本当だ。ならわざわざこっちに持ってこさせなくても…」
「だね」

「持つてくるときに全員連れてくりや済む話だったのに…もしかしてあのばかいちよう、見落としたんですかね」

「先生もそうしてほしかったのかもね。でも中川くんが見落としてるようには思えないけど…」

「夜光、必要なさそうなものは読まない人だから」

…余計なことを、言った気がする。そんなの昔のことだ。今がどうかなんて知らない。昔なんて、どうでも良いのに。

へえ、と頷く秀に早口で多分ねと告げてプリントを7枚とって扉を開けた。生徒会室に行かなければならない。面倒くさいけど行かなければならない。…プリントくらい、生徒会長なんだからちゃんと読めば良いのに。心の中で愚痴りながら秋雨と秀と並んで生徒会室に向かった。

a c t 6 : お疲れな人々（後書き）

久々にも程が…。

運動会については別のものとして連載させていただく予定です。
運動会思った以上に何か長くなりました。何か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397d/>

いけいけ！風紀委員長

2010年10月10日21時09分発行